『日本文学から文化根源を考える』

LIBRARY IICHIKO 160 AUTUMN 2023　10月31日 発売予定

文学・文芸は、「虚構」の文言・言語ではない。人間存在や歴史文化的存在における言説的プラチックである。

日本の文化資本の歴史に、哲学的な形而上学言説がない。そこに「思想」（近代思想、現代思想）なる奇妙な立場論が客観世界であるかのように現代世界で生まれたが、シニフィエ整理か本質課題の問題提起になっているだけで、理論言説になっていない。また、近代西欧の哲学の翻訳は、コプラも命題形式もない日本語世界に、根無草の哲学言説を作ってしまった（作ってしまったのはすごいことだが）。日本語自体への検証も考察もなく。新自由主義世界は知識経済にデータ情報世界が重ねられているが、地盤のない知的理性を日本では浮遊させてしまっている。

「近代の大いなる物語」は、充足されたのではなく、充足不可能の限界に充足している。「近代の大いなる物語」の可能条件とその批判考察、そしてそれに代わるものの可能世界を本誌はひたすらさまざまな対象において探ってきたが、民俗、精神／心性、言語、環境、技術の「存在」地盤に、文化資本・文化技術の本質とその歴史的表出を検証し、述語制・非分離・場所・非自己の日本文化の本質存在と意味作用の発見にいたった。その経済や統治性の新たな指針が可能になる地平も開き、さまざまな分野での影響波及も生まれている。

「近代の大いなる物語」にとどまっている知性は、物事を実体化し、分節化し、客観へ総合化する。穴や空の論理まで実体化して気づかないでいる。言語のデータ化の転倒はその典型である。現実界は実体化に実定された世界を遥かに超えて複雑であるのに、シニフィエだけが真理・真実だとされて、現実世界の「動き」が捉えられなくなっている。語られえていない、考えられえていない「実際的なもの pratiques」が、哲学でいまだに「実践」概念空間でしか捉えられていない。さらに〈subject/sujet〉の「従体」世界が「主体・主語」の「主」だと思い込まれている擬似哲学次元は早く脱皮せねばならない。欧米でさえ〈主〉語などない。文学・物語は、〈主体の実践〉世界ではない。歌謡の述語表出は、日本の文化軸である。文学・文芸が表出してきた言語プラチックを、言説的次元から見直す。

「終わりへの始まり」が、限られた論者しかいない状況の中であろうと、知的・情緒的な資本の意味作用生成としてなされ、人々のそれぞれの役に立っていくことを信じ希望し、探求に邁進する。

浅利誠氏の訃報がパリから届いた。急遽、追悼号に組み替えた。言文一致への考証をすべきだと唱えたのは氏である。本誌でしか連載の場はないと、数年にわたり、格助詞から日本文法を哲学的にも組み替えている途上であった。新たな連載論稿は、ゲラ校正される間もなく遺稿となってしまった。述語制言語の探究の同志を失った。無念である。心よりご冥福を祈ります。

▼浅利誠「非存在論的言語の文法：言文一致以後の口語日本文法【遺稿】」▼兵藤裕己「言文一致体という「近代」ことばと「現実」、泉鏡花の口語文体をめぐって(2)」▼野口武彦「廿一世紀日本語言文の現在地」▼鈴木貞美「日本のナラトロジーへ(2)」▼山本哲士「日本語の述語制文法の言説資本：draft 1」▼カラー特集　「スリランカのアーユルヴェーダ――自然のもつ癒しの力」

「LIBRARY IICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇二四年一月末発行予定

A5 変形　128 頁　1650 円（本体＋税 10%）

【監修・アートディレクター】
河北秀也（かわきた　ひでや）
1947 年生まれ。日本ベリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。
本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士（やまもと　てつじ）
1948 年生まれ。
政治社会学、ホスピタリティ環境学。
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『〈もの〉の日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』『フーコー国家論』ほか多数。

文化科学高等研究院出版局

Email: ehesc@gol.com　　ehescbook.com

ご注文はJRCへ→ Fax. 03-3294-2177

貴店名

部数　　冊

日本文学から文化根源を考える

LIBRARY IICHIKO 160　AUTUMN 2023　1650円（税込）

ISBN 978-4-910131-39-9 C1010 ¥1500E

文化科学高等研究院出版局　tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084